



Title	使徒教父におけるἀλήθειαについて
Author(s)	加藤, 邦雄; Kat?, K
Citation	基督教学, 8, 23-29
Issue Date	1973-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46290
Type	journal article
File Information	8_23-29.pdf



使徒教父における *anysia*

加藤 邦 雄

使徒教父 Apostolic Fathers と一般に呼ばれている者たちの著作は一般に、ローマのクレメンヌ書簡、イグナテオスの書簡、ポリカルポスの書簡、ポリカルポスの殉教記、十二使徒の教、バルナバ書簡、ヘルマスの牧者、デオグネトスの書簡、その他を含むが、その中には紀元一〇〇年頃から見ても、一〇〇年以上も遅れて書かれたものがあると考えられて、これを使徒教父なる名で呼んで一括して論じることが困難である。それ故に紀元九五年頃に書かれたと思われるローマのクレメンヌの書簡、それから余り遅れては書かれなかったと思われるヘルマスの牧者、使徒の教と言われる文書の中で紀元一〇〇年から余り遅れて書かれたとは思われない部分、アンテオ

キアのイグナテオスの書簡を主なる資料として用いて、これを仮りに使徒教父——そのように呼ぶことは世間では認められていないが——と呼んで論じたい。それは、新約聖書に直ちに続く時代であって、ある意味では新約聖書の中にも含まれている文書とほとんど同時代に書かれたものであると言いたい。

anysia なる語が以上のような文書の中でどのような意味で用いられているかを論じたい。その場合、新約聖書における *anysia* と、使徒教父のそれとが全く同一の意味に用いられているのか、それとも、幾分相違しているか、それとも、両者は非常に相違しているのか、を論じたい。しかし、新約聖書における *anysia* と言っても、問題はけっして単純ではない。なぜならば、新約聖書において *anysia* はヒブル語の系譜に由来する意味内容と、ギリシヤ語の系譜のそれとが、溶け合っているからである。ヒブル語の系譜の場合、もし *anysia* の背後にヒブル語の *emeth* があったと、かりに推定するとしても、単にそれだけではなくて、James Barr が指摘するよう⁽¹⁾に、*emeth* は *floris* とも訳われ、*burasobun* とも訳

されている。そして、*ἀληθεια* と言っても、ヒブル的な考え方によると、少なくともつぎのように三つの内容を含んでいた。すなわち、faithfulness と reality と covenant relationship とである。

ἀληθεια をもしもギリシヤ語の系譜によって理解するならば、大体においてつぎのようになる。すなわち、それは、第一に、「うそでないこと」「ほんとうのこと」を意味する。第二に、表面にあらわされたことのみでなくて、その奥にある「事実そのもの」を意味する。第三に、道徳的および宗教的に「真実なこと」。第四に、日本語で一般に「真理」なる語で表現されることである。一般に、ギリシヤ語の *ἀληθεια* を truth とか Wahrheit とか訳すが、truth や Wahrheit は日本語の「真理」より意味がひろくて、「真理」のみならず、「事実そのもの」や「真実」をも意味する場合がある。それに反して、日本語の「真理」は最も狭い意味に用いられている。日本聖書協会発行の口語訳聖書で *ἀληθεια* は八割まで「真理」と訳されたが、文語訳のように「まこと」と読むと、その語義の範囲が相当広くなる。

使徒教父文書の中で、恐らく、最も早く書かれたと思われる、「ローマのクレメンスのコリント第一書」を開けて見ると、その中に一〇回以上 *ἀληθεια* が用いられている。その一九章一節では、*ἀληθεια* が「恐れ」と並んで使用されており、三二章二節では「義」と並んで用いられており、その他、キリスト者が神に対し、人に対して抱えている道徳的、宗教的な真実 faithfulness を意味する箇所が多い。六〇章二節に、「汝の僕らと婢らとのすべての罪を算えたもうことなく、汝の *ἀληθεια* のきよきによりて、きよめたまえ」と言う祈禱の言葉がある。ある人は、この *ἀληθεια* は、「正統的教義」を意味すると解するが、その言葉の少し前に、「汝はよろず世にわたりて、真実でいまし」云々とある所から判断すると、「神の真実」としての *ἀληθεια* であると理解したい。一八章六節に「汝は *ἀληθεια* を愛しもう」なる句がある。この句に続く文章は七十人訳による詩篇五一篇六節の引用であるが、現行の邦語訳とは一致しない。この *ἀληθεια* は、神の知恵によらねば知り得ない、神と人との間の関係、すなわち「暗くて、しかも、隠された事

柄」を意味する。以上のようにローマのクレメンズ第一書における *apokalypic literature* の用法を見ると、異端に自らを対比させるものとしてのキリスト教信仰の真理性を *apokalypic literature* の一語で表現した例はほとんど見当らない。従って、新約聖書の牧会書簡に見られるような、誤まった教説に対比する意味での *apokalypic literature* の用法は、クレメンズ第一書にはほとんどないと言ってよい。

つぎに「ヘルマスの牧者」なる文書を取り上げるが、この書の中に、*apokalypic literature* なる語は十数回用いられている。そして、その用法を内容から判断すると、ヘルマスの牧者における *apokalypic literature* は、ローマのクレメンズのそれよりは少し多様性をもっているようである。「ヘルマスの牧者」において、*apokalypic literature* が、神に対する、また人に対する、キリスト者の「真実」*faithfulness* として用いられている箇所が最も多い。たとえば、その「律法篇」⁽⁴⁾ 八章九節において *apokalypic literature* は、「信仰」「主を恐れること」「愛」「一致」「義」「忍耐」などと並んで用いられている。また一二章三節の一でも *apokalypic literature* は「義」「徳」「主を恐れること」「信仰」「柔和」などと並んで使用されて

いる。しかし、ヘルマスの牧者なる文書は、本来ある程度まで *apokalypic literature* によく見られるような性格をもっていることに由来すると言えようが、*apokalypic literature* が黙示又は啓示と結びつけられて用いられている例がいくつもある。たとえば「啓示篇」三章三節の五に「汝の探求によりて、汝は *apokalypic literature* を発見せり」とある。啓示内容を *apokalypic literature* なる語で規定している箇所は、それ以外にも、たくさんあって、たとえば「律法篇」三章四節、五節、一〇章一節四、五、などがある。さらに、これと深い関連があると思われるが、*apokalypic literature* を *revelation* すなわち、聖霊との関連において用いている例がいくつもある。たとえば、「律法篇」三章一節につきのような文章がある。「*apokalypic literature* を愛せよ、汝の口から *apokalypic literature* 以外の何ものをも出さなかれ。そは、この肉の中に神が住ませたもう御霊なればなり」と。さらに、三章五節には「*apokalypic literature* の *revelation*」と言うヨハネ福音書と全く同一の語が用いられている。また、一一章四節には、迷いの霊に把えられぬように、*apokalypic literature* を着なさい、と教えている。このように「ヘルマスの牧者」を見ると、*apokalypic literature*

は単に「真理」として理解されるものであるのみならず、すでに聖霊の働きと言うか、あるいは聖霊そのものと言うか、そのような動的な働きとして描かれている。このような面は、ヘルマスに特に見られる特質であって、あるいは、ヨハネ福音書の影響下に本書があったと見るべきか、あるいは、ヨハネ福音書と共通の基盤に立っていたと理解すべきか、いずれとも早急に断定は下し得ないが、ヘルマスにおいて、*kyria* が、虚偽と対比して用いられている箇所がある。たとえば、「律法篇」三章四節である。しかし、その場合、*kyria* は啓示の内容であるから、*kyria* なのであって、啓示を離れて、人間理性一般によって支えられている真理としての *kyria* と言うようなことを言っているわけではない。また「啓示篇」三章七節の三に、*kyria* の純粋性なる句があるが、これも、啓示を純粹に伝えた時、その啓示が *kyria* であるとしている。ヘルマスにおいて、以上のように、*kyria* は虚偽との対比においても用いられていないことはないが、その全体を見る時、その点にそれ程大きな比重は掛けられていない。むしろ、啓示として与えられた *kyria* を

どこまでも純粋な形で伝えて行きたいと言う悲願が見られる。察するに、それは、「ヘルマスの牧者」なる文書の著者の立場に関係があるであろう。すなわち、本書の著者は奴隸階級の出身であった。そして、教会を支配したり、指導する立場にあった教職ではなかったので、啓示された *kyria* の内容を、symbolic な表現を用いてドラマの形式で後世に残したかったのであろう。

「十二使徒の教」⁽⁵⁾「五章二節」に「善良な人々を迫害する者たちがあって、*kyria* を憎み、偽りを愛している」と言うような文章がある。この句と全く同一のものが、「十二使徒の教」より遅れて成立したと思われる「バルナバ書簡」の二〇章二節にある。そこに資料問題が起きるわけであるが、そのことはいずれにしても、*kyria* なる語が、偽りと対比された意味で用いられていることに注意を払いたい。「十二使徒」の中に、それ以外の箇所でも、いくつか *kyria* に言及した文章があるが、その部分の成立年代は幾分後世になると思われるので割愛する。アンテオキアの司教イグナテオスの書簡が幸いにも現存しているので、それを最後に論じたい。小アジア

のスマイルナの司教であつて、殉教者として有名なポリカルポスに宛てて、イグナテイオスが書き送った書簡の七章三節に「あなたの *arsena* の香りを知っているのぞ」云々と書いた。その場合 *arsena* は「真理」であるよりは、ポリカルポスの信仰や人柄を指すので、普通は「眞実」*Sincerity* であると理解される。しかし、イグナテイオスがスマイルナの教会に宛てて書き送った書簡の中には、つぎのような句があつて、ポリカルポスへの書簡の場合の *arsena* の意味とは幾分相違する。すなわち、「しかし、ある人々は無知のため彼を否定している。むしろ *arsena* よりも死を選んだので、彼によつて否まれてしまったのである」と。この場合の「彼」は恐らく神であろうが、*arsena* が死との対比として描かれていることに注意を払いたい。すなわち、*arsena* は生命の道である。そこで「我は道なり、*arsena* なり、生命なり」とヨハネ福音書の中に書かれている場合の *arsena* の用法を思い起さざるを得ない。その *arsena* は世間一般で言う真理一般ではなくて、イエス・キリストとその救済のわざを意味する。それは *arsena* を指し示す者である

のみならず、*arsena* そのものであると主張している。イグナテイオスが、フィラデルフィアの教会へ送った書簡一二章一節につきのような文章がある。「それ故、*arsena* の子たちとして、分裂と悪しき教とを避けなさい」と。教会内の「誤まった教」がここで *arsena* と対比されている。

また、イグナテイオスが小アジアのエペソの教会へ送った書簡の六章二節につきのような文章がある。「あなたがたはすべて *arsena* に従つて生活している。それで、あなたがたの間に異端 (*aitheois*) は一つも根をおろしていない」と。ここで (*arsena*) は明確に異端 *aitheois* なる語が用いられている。なお、*aitheois* なる語は、これより早く、既に「ヘルマスの牧者」の「比喩篇」九章二三節の五に用いられているが、その場合 *arsena* との対比においてではない。新約聖書の中にも *aitheois* なる語は用いられているが、その用法のすべてが「異端」であるとは早計に断定してはならぬ。イグナテイオスは「トラリア人への書簡」六章一節その他にもこの語を用いた。そこでイグナテイオスにおいて、*arsena* の意味

はけっして一様ではないが、とにかく、明白に *apeiros* との対比においての *azyssea* なるものを表現した。その場合、*azyssea* は *apeiros* (異端) に対比する「正統信仰」を意味していたと言っても大きな誤まりはないであろう。

この時代における *azyssea* の用法をもう少し検討するために、イグナティオスと同時代であつて、彼と深い信仰の交わりをもっていた、スミルナの司教ポリカルポスの用法に触れたい。但し、ポリカルポスの殉教そのものはイグナティオスの生涯より幾分遅れたものではあるが、ポリカルポスがビリビの教会へ送つた書簡の中からつぎのように四箇所引用したい。

二章一節 「恐れと *azyssea* とをもつて神に仕えなさい」
三章二節 「注意深く、正確に、*azyssea* に関する言葉」
四章二節 「愛と純潔とにおいて……彼らの夫たちをすべての *azyssea* において育て」

五章二節 「主の *azyssea* に従つて歩み」
とある。

以上はいずれも信仰生活に関する *azyssea* である。そ

れは真理一般の意味では勿論ない。神の啓示と、神の憐れみとに支えられた、信仰者の道としての *azyssea* である。それ故に、少なくとも、ここに引用したポリカルポスに関する限り、*azyssea* は依然として旧約聖書が *emeth* として言いあらわしたと、大体同じ内容であると言えよう。少なくとも、その *azyssea* は *emeth* の系譜に由来するものを大体内容としていえると言えよう。

このようにポリカルポスについて言えることがその友人イグナティオスについてもそのまま言えるかどうか、軽い判断は下せない。しかし、つぎのように言えるであろう。イグナティオスにおいても、本来は、*emeth* に由来する *azyssea* を意識していたが、*apeiros* との対比において *azyssea* を表現せざるを得なくなった面もある。しかし、イグナティオスにおいて *apeiros* との対比において *azyssea* が語られているからと言つて、イグナティオスにおける *azyssea* の理解は首尾一貫して、正統か異端か、あれかこれか、と *legal* な思想形式であつたとは言えない。勿論、イグナティオスにおいて、司教 *episcopos*、司祭 *presbyteros*、助祭 *diaconos* なる三職

制が確立されたと言われる。そのことと、異端に対する正統信仰の主張とは、論理的に言って、相互関連は当然あったと認めねばならぬ。しかし、イグナテリオスにおいて、福音に対する異端をただすものとして、*dyseia* が主張されたが、その *dyseia* がそのまま直接性において真理一般の主張であったと断定できる理由は恐らくないであろう。

むしろ、以上論じて来たことをつぎのように要約したい。今まで取り扱って来た使徒教父に限定するならば、神との *covenant relationship* とこの *emeth* の内容を完全に排除した意味での *dyseia* の用法はなかった。多くの場合 *emeth* と *dyseia* とが溶合されて用いられていた。クレメンスはほとんど全く *emeth* の考え方に終始しているようである。ヘルマスも、クレメンスからほとんど離れてはいない。イグナテリオスになると福音の真理としての *dyseia* を主張している箇所があるが、その真理はどこまでも福音の真理に忠実であろうとしている。イグナテリオス以後にむしろ *dyseia* についての理解に大きな変化が起きたと言えよう。

註

- (1) James Barr, *The Semantics of Biblical Language*, p. 188. "Faith and Truth"
- (2) Truth については "to say truth" と言うような用法があるが、真理ではなくて事実を意味する。
- (3) 教会書簡の書かれた年代と背景とをここで論ずべきであるが、割愛する。
- (4) ヘルマスの牧者における「律法」篇または「誠命」篇とでも訳すべき部分を指す。以下、「啓示」篇も同様。
- (5) 一般に *Didache* と略して呼ばれるが、内容から見て早期の部分と後期のそれとが区別される。